

運動能力と性格〔I〕

佐 伯 重 幸

(昭和37年1月20日受理)

1 研究目的

Ernst Kretschmer が体格と性格との間に一定の確実な相関関係があることを指摘しかつ証明しているように、人間の心的生活の機能は、常に一つの生命をもつ身体が存在及び身体の個々の器官の状態に依存する。

性格を単に精神物理的な統一体としてのみならず、社会的存在としての人間の具体的な種々なる行動の全体から浮びでる固有の姿態として現われるものとして、個人に固有なる心の様式として把握する場合、学習指導要領において、小学校から高等学校にわたって示されている保健体育の一つの目標、即ち、「運動における競争や協同の経験を通して公正な態度を養い、自己の最善を尽くし、相互に協力して、個人や集団の目標の実現に向かって努力する能力や態度を養い、社会生活における望ましい行動のしかたを身につけさせる」—高等学校—は、運動の合理的実践を通して、望ましい性格の育成に貢献すべきものであることを示すものとして認知できる。

また、体育運動を盛んに行ういわゆるスポーツマンには、一種特有な性格があるといわれ、それは磊落であり、小節にこだわらず、親切であり、明朗であるということにおいては大体世人において一致している意見であり、体育の実践の必然の結果として性格の育成が期待されるというものではないが、現実的な実践場面において、その機会が豊富に与えられ、実行を通しての習慣づけが比較的容易になされるものである。

性格の形成及び改変には、適当な社会的場を構成することが必要であり、体育においては、単に物理的、空間的条件だけでなく、力動的性質をもった全体的事態としての場の構成如何んが、性格の育成に最も強く影響するものであるが、身体活動を手段とする学習が諸運動能力を発達させることから、知的優秀児に関する研究において、知的にすぐれている子供は、性格的にもすぐれた望ましい面が多いことが明らかにされていることと対比して、運動能力にすぐれた子供が性格的にもすぐれた望ましい面を持っているかどうかをみようとするものであり、全体としてつかむ前に、まず個々の特性にメスをあてることにし、本研究においては、平衡能力をとり上げて性格との関係を見ることにした。

2 研究方法

1. 対象；長崎県下高校2校の3年生男子266名、女子254名について実施した。
2. 期間；昭和36年10月中旬
3. 内容；性格検査は、淡路・岡部式向性検査を平衡能力検査と同時に実施し、一週間

において矢田部・Guilford 性格検査を実施した。

平衡能力検査は IOWA Brace Test 種目を中心にして、次の6種目を実施した。

- (1) 方法；顔を右に向ける。両手を横にあげ片方の足を床から離し、バランスをとりながら立っている方の足の膝を曲げて膝をつく。この姿勢を5秒間保つ。あげている方の足は膝をつくときに前に出しても後に出してもよい。
 失敗；立っている方の足と膝以外の他の体の部分が床にふれる。転倒する。所定の姿勢を5秒間保てない。
- (2) 方法；左足で立つ。右足裏を左膝の内側にあてて立っている。両手をお尻に置いて両眼を閉じる。左足を床から離さないで上記の姿勢を10秒間保っている。
 失敗；バランスを失う。右足を離して床に下す。お尻にあてた手を離したり、眼をあけたりする。
- (3) 方法；両手を横にあげ、片方の足を床にふれることなく後方に伸ばして他方の膝を床につく。膝をついたなら体を前に曲げて頭を床につける。バランスを失うことなく頭を床から離して体を起す。
 失敗；動作を完了するまでにあげた足や体の他の部分を床にふれる。床に頭をつけることができない。横にあげた手を下す。
- (4) 方法；全屈膝の姿勢になる。一方の脚を前方に伸ばす。体を支えている方の足で跳んで前に出した足を引込めると同時に他方の足を前に出す。この動作を各々の足で2回宛繰り返す。前方に伸ばした足の踵は床についてもつかなくてもよい。
 失敗；バランスを失う。各々の足で上記の動作を2回宛しない。
- (5) 方法；どちらの足でもよいから膝を曲げて片脚全屈膝の姿勢をとり他の脚を床から離して前にあげて伸ばす。手は腰にとる。この姿勢を5秒間保つ。
 失敗；腰から手を離す。前に伸ばした脚を床につける。バランスを失う。
- (6) 方法；どちらの足でもよいから先
 ず片足で10秒間立ち、その後直ちに立っている方の足の踵をあげてこの姿勢を10秒間保つ。目は開いて前方を見、重心をのせていない方の足は前方にあげて手は腰にとる。
 失敗；踵をあげてから10秒間保てない。体重支持脚が移動

第1表 平衡能力テスト成功種目数による区分

		男 子			女 子		
C 群	0	5	27	C 群	0	36	36 (14.2%)
	1	22	(10.2%)				
B 群	2	48	190	B 群	1	61	202
	3	67	(71.4%)		2	60	
	4	75			3	42	(79.5%)
					4	39	
A 群	5	39	49	A 群	5	12	16
	6	10	(18.4%)		6	4	(6.3%)
計			266	計			254

する。あげた足が床または支持脚にふれる。支持脚の膝をまげる。
上記6種目を各々2回宛行なわせ、2回とも失敗した場合は不成功として
取扱った。

3 結果の整理と考察

平衡能力検査の結果は第1表(前頁)の通りであるが、平衡能力検査6種目中、男女とも5種目または全種目できた者を優れた者=A群、男子で5種目または全種目できなかった者女子で全種目できなかった者を劣る者=C群、その中間をB群として考察をすゝめることにする。

第2表 男子 平衡能力テスト成功種目数と向性指数との相関表

$$r=0.107 \quad \bar{X}=112.6 \pm 22.73$$

成功種数	向性指数	50	58	66	74	82	90	98	106	114	122	130	138	146	154	162
		58	66	74	82	90	98	106	114	122	130	138	146	154	162	170
C群	0	1	—	—	—	—	—	1	—	1	1	—	—	1	—	—
	1	—	1	1	—	3	1	1	6	2	2	1	2	1	—	1
B群	2	2	2	1	—	3	3	4	9	10	6	7	1	—	—	—
	3	1	1	3	3	1	6	9	9	11	6	8	6	2	—	1
	4	1	2	2	3	3	10	9	9	13	11	6	4	1	1	—
A群	5	—	—	—	3	1	2	5	3	4	5	7	3	5	1	—
	6	—	—	—	—	—	—	3	—	2	1	1	—	1	1	—

第3表 女子 平衡能力テスト成功種目数と向性指数との相関表

$$r=0.104 \quad \bar{X}=112.6 \pm 23.90$$

成功種数	向性指数	42	50	58	66	74	82	90	98	106	114	122	130	138	146	154	162
		50	58	66	74	82	90	98	106	114	122	130	138	146	154	162	170
A群	0	—	—	1	1	1	2	2	3	5	7	6	2	4	1	—	1
	1	1	—	1	3	6	10	5	5	4	10	2	7	2	4	—	1
B群	2	—	1	—	—	2	7	8	5	12	10	2	5	4	2	1	1
	3	—	—	—	3	2	3	3	4	4	3	4	4	4	4	1	1
	4	—	—	1	—	1	3	4	2	3	9	7	3	5	—	—	1
C群	5	—	—	—	—	—	—	—	2	3	1	1	1	2	1	1	—
	6	—	—	—	—	—	—	1	1	1	—	1	—	—	—	—	—

淡路・岡部式向性検査による向性指数と平衡能力テスト成功種目数との関係は、第2表および第3表の通りである。

両者間の相関係数は、男子0.107、女子0.104で有意ではない。しかし、A群の向性指数は男子で74以上、女子で90以上の段階にあり、また向性指数の平均は、男子でA群—C群=115.8—111.6=4.2、女子でA群—C群=120.3—115.0=5.3となっており、これらのことから平衡能

力の優れた者は劣る者に比較して、やゝ外向的であるとみることができる。

平衡能力に優れているということは、身体支配力に優れていると解釈でき、従ってスポーツを行う場合、それに適応できる基礎的な身体能力を備えているとみることができるわけで、スポーツマンとしての素質を持ち、その性格も一般的なスポーツマンの性格に相通ずるものがあり、それは、外向型のものが、心的エネルギーが主として外界の客体に向って作用し、群居を好み、外界・他人などに興味を示し、現実的で陽気でどん どん仕事をやってゆくという個性と、或程度の関連を持たせ得るのではなからうか。

第4表 矢田部・Guilford 性格検査

区 分 尺 度	男 子				女 子			
	A 群		C 群		A 群		C 群	
	粗 点	標準尺度	粗 点	標準尺度	粗 点	標準尺度	粗 点	標準尺度
D 抑うつ性なし	11.0	3	10.6	3	12.7	3	12.1	3
C 緒 緒 安 定	10.4	3	10.7	3	12.4	3	11.1	3
I 劣等感なし	8.6	3	8.4	3	10.6	3	10.2	3
N 神経質でない	8.1	3	8.9	3	11.7	3	9.6	3
O 客 観 的	7.3	3	8.2	3	9.9	3	9.4	3
Co 協 調 的	8.3	3	8.6	3	7.5	3	8.3	3
Ag 愛想がよい	11.1	3	8.8	2	11.1	3	10.5	3
G 非 活 動 的	12.4	3	10.1	3	13.3	3	11.0	3
R のんきでない	10.8	3	10.6	3	10.9	3	10.8	3
T 思考的内向	10.7	3	10.3	3	11.1	3	10.3	3
A 服 従 的	11.7	3	12.3	3	10.4	3	11.6	3
S 社会的内向	9.7	3	9.9	3	8.4	3	9.4	3

次に矢田部・Guilford 性格検査と平衡能力検査との関係をA群およびC群について総括的にみれば、粗点は第4表、標準点によるプロフィールは第1図～第4図の通りである。

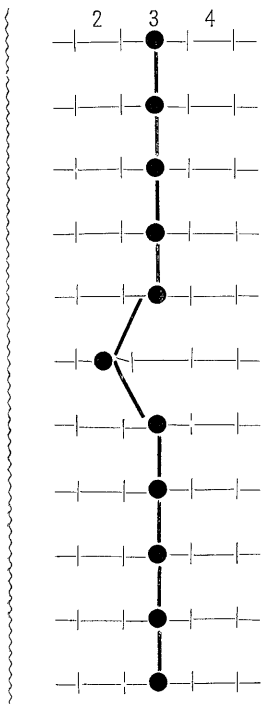
プロフィールでは女子においてはA群C群とも同じであり、男子ではC群がA群より愛想がよいという差異が出ている。しかし、粗点についてみれば、男子の愛想の差2.3は男子の一般的活動性の差と同じであり、女子の一般的活動性および神経質の差とほとんど差異はなく、これらは同じ観点から考察すべき性質のものである。

粗点において、A群とC群の間に2以上の差異が認められた男子の愛想および一般的活動性、女子の一般的活動性および神経質の各尺度と平衡能力との相関を第5表～第8表でみると、その相関係数は男子愛想0.154、男子一般的活動性0.087、女子神経質0.009、女子一般的活動性0.274でいずれも有意ではない。しかし、動作がきびきびしている、てきぱきと物事を片づける等を内容とする一般的活動性は、男子では第5表の通りC群の平衡能力テスト成功種目数ゼロ

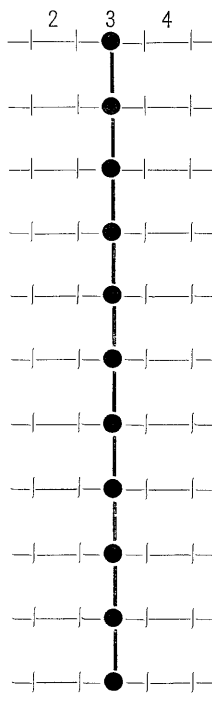
矢田部・Guilford 性格検査プロフィール
第1図 男子 A群



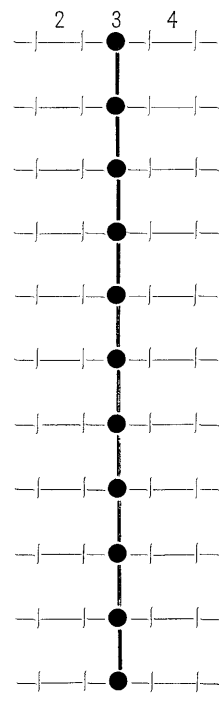
第2図 男子 C群



第3図 女子 A群



第4図 女子 C群



第5表 平衡能力と活動性との相関表（男子）

$r=0.087 \quad \bar{X}=3.17\pm 0.93$

成功目数	活動性標準点	1	2	3	4	5
	C群	0	1	4	—	—
B群	1	—	5	8	9	—
	2	—	10	18	16	3
A群	3	1	16	28	19	4
	4	4	12	31	22	6
A群	5	1	6	17	13	2
	6	—	4	1	2	3

第6表 平衡能力と活動性との相関表（女子）

$r=0.274 \quad \bar{X}=3.11\pm 0.81$

成功目数	活動性標準点	1	2	3	4	5
	C群	0	—	5	24	6
B群	1	4	14	34	10	—
	2	2	13	30	13	2
A群	3	—	6	21	12	2
	4	—	4	18	14	3
A群	5	—	—	4	6	2
	6	—	—	3	1	—

第7表 平衡能力と愛想との相関表（男子）

$r=0.154 \quad \bar{X}=2.94\pm 0.92$

成功目数	愛想標準点	1	2	3	4	5
	C群	0	2	1	3	—
B群	1	3	8	7	2	1
	2	1	9	25	8	2
A群	3	4	18	31	15	2
	4	2	22	30	17	4
A群	5	2	5	22	6	4
	6	1	1	4	4	—

第8表 平衡能力と神経質との相関表（女子）

$r=0.009 \quad \bar{X}=2.85\pm 1.00$

成功目数	神経質標準点	1	2	3	4	5
	C群	0	2	13	9	9
B群	1	2	19	27	10	4
	2	7	16	20	14	2
A群	3	5	12	16	7	2
	4	5	12	14	6	2
A群	5	—	1	7	4	—
	6	—	—	2	2	—

の標準尺度は2以下であり、女子においては第6表でみられるようにA群の標準尺度は3以上で、B・C群に比し著しい特徴となっている。このことは外向型でみられたのと同様に、平衡能力の優れている者は、身体的行動エネルギーおよび心的エネルギーが、主として外界の客体に向って作用する傾向にあるとみることができる。

愛想は、失礼なことをされるとだまっていない、目上の人とも遠慮なく議論することがある等を内容とするが、男子で平衡能力の優れている者がやゝ愛想が悪いということは、引込思案でなく自分を遠慮なく外部に発表するという外向型の特質と関連視できる。

女子で心配性である、些細なことを気に病む等を内容とする神経質的傾向が、平衡能力の優れた者に幾分みられることは、女子においては平衡能力の発達に伴って、情緒的色彩が繊細になる傾向があるとみることができるのではなからうか。

第9表 項目別比較表

内容	区分	項目	男子			女子		
			A 群	C 群	A-C	A 群	C 群	A-C
向 性 検 査		考えることより活動することの方が好きですか	73.5	66.7	6.8	93.8	63.9	29.9
		陽気というより陰気の方ですか	28.6	70.4	-41.8	25.0	19.4	5.6
		よくはしゃぐ方ですか	61.2	33.3	27.9	68.8	61.1	7.7
		仕事が綿密な方ですか	61.2	40.7	20.5	62.5	44.4	18.1
		自分のことを他人にまかせても平気ですか	34.8	14.8	20.0	12.5	11.1	1.4
		周囲の人々とうまく折合っていますか	91.8	70.4	21.4	93.8	90.4	3.4
		大勢と一しょに遊ぶことが好きですか	87.8	85.9	1.9	100	77.8	22.2
矢 田 部 ・ ギ ル フ ォ ー ド 性 格 検 査	抑 う つ 性	度々ゆううつになる	65.3	74.1	- 8.8	93.8	72.2	21.6
		ぼんやり考えこむせがある	57.1	37.0	20.1	68.8	61.1	7.7
		時々自分をつまらぬ人間だと思ふことがある	83.7	63.0	20.7	93.8	77.8	15.0
	情 緒 安 定	気持を顔にあらわしやすい	57.1	63.0	- 5.9	81.3	50.0	31.3
		早く決心すればよかったと悔むことが多い	43.3	66.7	-23.4	68.8	47.2	21.6
	神 経 質	心配性である	53.1	59.3	- 6.2	93.8	66.7	27.1
		些細なことを気に病む	30.6	31.6	- 1.0	68.8	36.1	32.7
		気むずかしい	24.5	44.5	-20.0	25.0	22.2	2.8
	客 観 性	時々ぼかんとしていることがある	50.0	70.4	-20.4	68.8	55.6	13.2
		とてもありそうもないことを空想する	50.0	59.3	- 9.3	81.3	52.8	28.5
		時々誰かに打ち明け話したい	69.4	44.4	25.0	81.3	77.8	3.5
	協 調 性	人は結局利欲のために働くのだと思う	34.7	51.9	-17.2	68.8	41.7	27.1
もっとちがう境遇に生れたかったと思う		36.7	51.9	-15.2	37.5	63.9	-26.4	
愛 想	失礼なことをされるとだまっていない	55.1	25.9	29.2	50.0	55.6	- 5.6	
	目上の人とも遠慮なく議論することがある	46.9	18.5	28.4	25.0	38.9	-13.9	
活 動 性	短い時間に沢山の仕事をやる自信がある	34.8	14.8	20.0	25.0	11.1	13.9	
	新しいことにもすぐなれる	63.3	55.6	7.7	68.8	41.7	27.1	
	てきぱきと物事を片づける	44.9	25.9	19.0	56.3	36.1	20.2	
	動作はきびきびしている	49.0	25.9	23.1	75.0	16.7	58.3	
	いきいきしている	44.9	37.0	7.9	56.3	33.3	23.0	
の き さ		色々違う仕事がしてみたい	75.5	48.1	24.7	68.8	58.3	10.5

思 考 的 方 向	用心深いたちである	59.2	70.4	-11.2	50.0	72.2	-22.2
	度々考えこむくせがある	63.3	66.7	- 2.6	81.3	61.1	20.2
	のんきなたちである	63.3	74.1	-10.8	31.3	72.2	-40.9
社 方 会 的 向	知らぬ人と話すときは固くなる	61.2	66.7	- 5.5	56.3	77.8	-21.5
	新しい友達は仲々できない	10.2	33.3	-23.1	18.8	25.0	- 6.2

次に淡路・岡部式向性検査および矢田部・Guilford 性格検査の各項目において、A群とC群に20%以上の差異が認められるものをあげると第9表の通りである。ただし淡路・岡部式向性検査項目で矢田部・Guilford 性格検査と同じ内容のものは省略した。

矢田部・Guilford 性格検査で20%以上の差異が認められる項目のない尺度は、男子は劣等感・服従性の2尺度、女子は劣等感・服従性・愛想の3尺度である。平衡能力の優劣は劣等感や服従性に影響を及ぼすことはないが、愛想のよしあしについては、男子では平衡能力に優れた者が自己主張が強く、女子では両者に差異はないとみることができる。

男女ともA群-C群の差が+または-の同じ方向を示す尺度は、両検査とも一般的活動性、のんきさ、社会的方向であり、この三者には性別特徴はなく平衡能力の優れている者の方が、精神的作業や身体的活動を円滑に行うことができ、比較的のんきで、社会的環境になじみやすく社会生活に対する適応獲得が早く、社会的行動がスムーズにとられやすいということになる。特に一般的活動性において、質問項目中、半数の5項目に20%以上の差異がみられることは平衡能力の発達を一般的活動性を高める一要因として把握できる。

A群-C群の差が性別によって反対の方向を示すものは、情緒安定・神経質・愛想の3尺度である。このことから同一の身体的機能を基盤としても、性別によってその性格の構成要因の示す方向は必ずしも同一ではないことがわかる。即ち、平衡能力が優れている場合、男子は内的および外的感情の動揺性が比較的小さいが、女子はその動揺性が比較的大きく、また男子は日常生活が開放的・外攻的であるのに対して、女子は閉鎖的内攻的であり、男子が自己主張を求める強固な性格を示すのに対して、女子は自己放棄を求める薄弱な性格を示す傾向がみられる。

客観性・協調性の2尺度は、項目によって+、-の方向が同一ではないが、平衡能力の優れた者が男子は協調的であり女子は協調的・非協調的のいずれとも把握し難く、女子が主観的であるのに対して、男子は主観的・客観的のいずれとも言い難いという傾向性はややみられるようである。

4 総 括

本研究は運動能力と性格との関係を個々の特性にメスを入れることによって究明せんために、運動能力を平衡能力に限定して測定し、性格検査は淡路・岡部式向性検査と矢田部・Guilford 性格検査によって実施されたものである。

矢田部・Guilford 性格検査の各尺度で、平衡能力の優れた者と劣る者の間に一応の差異が認

められた男子の一般的活動性および愛想のよしあし、女子の一般的活動性および神経質、並びに淡路・岡部式向性検査の向性指数における相関係数は、いずれも有意性を持たなかった。従って平衡能力の優劣が性格の形成および 変化に影響を与えることを統計学的に証明することはできなかった。

しかし、相関表並びに質問項目別に考察したところでは、最も高い傾向性を示すものとして平衡能力の発達が一般的活動性を高める一要因となることは確実に把握できたし、平衡能力の優れている者の方が、身体的行動エネルギーおよび 心的エネルギーが主として外界の客体に向けて作用するとともに、精神的作業や身体的活動を円滑に行うことができ、比較的のんびりで、社会的生活に対する適応獲得が早く、集団生活や友人獲得などの社会的行動が積極的であるという傾向性もうかがわれたし、同一の身体的機能を基盤として性格を比較するとき、性格の示す方向は性別によって必ずしも同一ではないという傾向もみられた。

このように一応の傾向性はうかがわれたが、統計学的な有意性を証明することができなかったところから、平衡能力の発達をはかることそれ自体が特有の性格育成に貢献するものであるとは言えない。

従って運動能力の発達のみを目的として構成された体育の場での学習活動は、価値の高い性格形成の機会にはなり得ず、体育活動の行われる全体の環境で学習される社会的に価値の高い適応の仕方が、性格の育成に大きく貢献するものであり、性格形成の機会を意図的に学習指導計画の中におりこみ、性格育成のための目標を学習者が認識し努力することによって、社会的規範に沿い、人間の文化的価値を創造してゆくのに参与する性格が陶冶されるとみることができる。

参 考 文 献

- | | |
|---------------|---------------|
| 体 育 心 理 学 | 松 井 三 雄 著 |
| 体 育 の 心 理 | 後 藤 岩 男 著 |
| 体 育 測 定 法 | 松 井 三 雄 著 |
| 体 育 測 定 | 竹 中 玉 一 著 |
| 性 格 学 概 論 | 高 橋 和 年 著 |
| 体 格 と 性 格 | E・クレッチマア 著 |
| 改 訂 心 理 学 | 正 木 正 著 |
| 現代教育心理学大系 第4巻 | 波 多 野 完 治 外 著 |